北から南から

災害に負けない地域のつながりと備え
～子ども達も楽しめる自主防災活動に地域住民が一体となって取り組む～

京都府 大山崎町 鏡田連合自治会 自主防災組織
会長 山本 和俊

1 はじめに

大山崎町は大阪と京都の中間に位置し、明智光秀と豊臣（羽柴）秀吉が天王山の麓で天下を争った「山崎の合戦」で知られています。また、桂川、宇治川、木津川という３つの大河川が合流する地でもあり、古来より交通の要衝として栄えてきました。鏡田地域は、高度経済成長期に開発され、当初は５つの町内会に分かれていましたが、昭和 51 年に「鏡田連合自治会」として再結成し、現在約 450 世帯、1,200 人が加入しています。結成当時は働き盛りの子育て世帯が大半で、出身が異なる寄り合い所帯ながら「子どものため」を共通の願いに、地蔵盆や体育祭など地域の絆を深めていましたが、近年では、生活様式の変化等で現役世代の参加意欲は弱まり、脱会者も増えていました。そうした中、誰もが安心して暮らせる地域づくりの再生を目指し、平成 22 年に「楽しく防災活動をやろう」を合言葉として「鏡田連合自主防災組織」を結成しました。

2 防災学習会
～子ども達も楽しめる自主防災活動に地域住民が一体となって取り組む～

毎年１～２回、自主防災組織の役員が講師となって、防災の基本や新しい災害事例を紹介し、グループワークを行う防災学習会を開催しています。役員は「教えたり運営したりすること」の難しさを実感しつつ、役員同士の協力を通じて「なかまづくり」に繋がり、より明確な知識の習得や課題の共有が図れています。また、参加者からも「正常性バイアスなど新たな知識が得られた。今後は近隣の方々や友人を誘いたい。」との声があがっています。

大人の防災学習会（研修）の様子

3 「防災」だけじゃない訓練「ふれあいまつり」

結成当初の防災訓練は、行政・消防署の協力のもと、消火・救助などの体験訓練を行っていましたが、徐々にマンネリ化の指摘が高まりました。そこで、楽しい活動となるように名前も「ふれあいまつり」に変え、企画段階から女性や子育て世代の意見を取り入れる委員会を設置した結果、子ども、保護者、高齢者が協力し合うバケツリレー、防災クイズ、炊き出し訓練、防災縁日など、工夫を凝らした新しい企画が次々と生まれ、活気が戻ってきています。

ふれあいまつり（防災訓練）の様子

防犯・防災まち歩き（新たな発見）

防災倉庫内の資機材の使用体験

防災訓練（消防署員からの防火説明）

消火訓練（バケツリレーの様子）

4 子どもたちと一緒にオリエンテーリング「防災・防犯まち歩き」

小学生、保護者、高齢者が一緒に地域を歩き、防災・防犯上の危険箇所や防火水槽などの位置を確認して防災マップを作っています。作成した防災マップは「小学生ぼうさい探検隊マップコンクール」にも応募するなど、将来の防災リーダーの育成にも力を入れています。また、親子参加型とすることで、現役世代の参画が実現しています。

5 おわりに

鏡田地域は、過去に4回の浸水被害が発生しており、最近では平成24年に内水氾濫による床上浸水が発生しています。また、阪神・淡路大震災や大阪府北部地震、平成30年台風第21号などでも、多くの住宅が建物被害を受けました。価値観の多様化や高齢化が進む中、激甚化する災害への対応策も複雑性を増すことが予測されます。「災害は忘れた頃にやって来る」、常日頃から防災についてはしっかりと認識し、関心を持つ事がとても重要です。誌面の都合上、全てを紹介することはかないませんが、防災学習会の開催、手作り防災マップの作成、独自の広報誌「防災ニュース」の発行、全世帯連絡網の構築など、住民に自主防災組織のことを知ってもらえるように工夫をしてきました。住民間のふれあい、住民の横のつながり、地域全体での情報共有、状況に応じた避難行動など、自分の命は自分で守る、地域は地域で守る、自助・共助の取り組みを中心に、行政の公助による補完体制を構築しながら、引き続き自主防災組織活動を通して、自治会の活性化に寄与し、鏡田地域を守って行きます。子ども達には豊かな想像力と受容性を駆使した発想で、災害に強い地域を作り上げる防災リーダーとなる事を期待しています。